

西郷隆盛「憶弟信吾在仏国」詩中の「姑息」について

大淵 貴之*

(2020年10月21日 受理)

On the Interpretation of “Kosoku” in Saigo Takamori’s Classical Chinese Poem

OBUCHI Takayuki

要約

西郷隆盛（1828¹-1877）の漢詩に、フランス遊学中の弟従道（通称信吾。1843-1902）に寄せた七絶「憶弟信吾在仏国（弟信吾の仏国に在るを憶う）」がある。その転句「欲離姑息却姑息」については、従来、諸家により一応の解釈が示されてきたものの、未だ全体の詩意から見て収まりの良い解釈は行なわれていない。小論では、当該句中に二度現れる「姑息」に焦点をあて、それが『礼記』檀弓上篇の一節を踏まえた措辞であったことを指摘する。これにより、該句及び本詩全体の意味を明確にすると同時に、幕末明治期を生きた士人の漢学的素養について、その一端を具体的に示したい。

キーワード：西郷隆盛、西郷従道、姑息、『礼記』、漢学的素養

1 西郷隆盛「憶弟信吾在仏国」詩の本文と作詩の背景

小論に取り上げる七絶「憶弟信吾在仏国」は、西郷隆盛自筆の墨跡によってその本文を確認することができる²。以下、墨跡に基づき適宜改行を加えて本文を示す。

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

¹ グレゴリオ暦による（1828年1月23日生まれ）。和暦では、文政10年（1827）12月7日生まれであり、弟従道（天保14年5月5日〔1843年6月2日〕生まれ、西郷従宏『元帥西郷従道伝』48頁〔芙蓉書房出版、1997年〕による。通行の人名辞典や百科事典の類によれば5月4日生まれとは、数え年で16歳差となる。

² 青山会館編『南洲先生遺墨集』14頁（工藝社、1926年）を参照。本書の注記によれば、当該墨跡は影印当時、西郷従道の次男従徳（1878-1946）の所蔵であった。

兄弟東西千里違
 今宵齋戒客星祈
 欲離姑息却姑息
 不願多能願早歸

憶弟信吾在拂國 南洲

従道は、朝命を受けて明治2年(1869)6月に長崎を出港し、主としてフランスに滞在して兵制の視察研究を行ない、イギリス、アメリカを経て明治3年(1870)7月に帰国する³。隆盛自身による詩題「おとうとしんご ふつこく あ おも 弟 信吾の仏国に在るを憶う」及び起句の「けいてい とうざい せんり たが 兄弟 東西 千里に違い」から、従道遊学中に於ける作詩と判断される。この期間の隆盛は、政府残留の要請を辞退し、明治2年6月5日に浦賀港より帰郷の途につき、殆どを鹿児島の地で過ごしている⁴。

我ら兄弟は今、日本とフランスと東西に遥か隔てられたという詠い出しを受け、承句では「こよひ さいかい かくせい いの 今宵 齋戒して客星に祈る」と、隆盛が身を清めて客星に祈る姿が描写される。客星とは、文字通り星空にあって客と言える彗星や超新星等の臨時に出現する星を指すが、ここではおそらく西晋の張華『博物志』等によって知られる中国の伝承を踏まえたものと解し得る。すなわち、天河(天の川)は海と通じていて毎年8月に往来するいかだ 筏があった。或る時、大志を抱いた人物が筏に乗って天河を目指して進み、着いた先で牛飼いと言葉を交わした。無事地上に戻って後、道家げんくんべいの嚴君平にこのことを訊ねると、まさに天河に到着した月日に客星が牽牛星に触れていたという伝説である⁵。

西郷隆盛は、海を渡り視察先のフランスで客たる弟従道について祈る対象に、星空に於いて同じく客であり、大海と天河を往来して無事地上に帰り着いた人物(と筏)の化身でもある客星を選んだ。巧みな措辞と言えるであろう。無事を祈る気持ちは、結句に於いて「たのう ねが そうき ねが 多能を願わず、早帰を願う」と、より直接的な表現でもって述べられる。この弟の無事を願う気持ちは、詩題と合わせ考えてみても、本詩全体の趣旨であるべきと察せられるのであるが、そこで問題となるのが転句「欲離姑息却姑息」の解釈である。

2 転句に対する諸家の解釈

西郷隆盛の漢詩については、日本史上に於ける所謂偉人としての抜群の人気と知名度のためであろう、従来諸家による整理と研究が幾つも行なわれてきた。管見の上に門外漢の判断することでは

³ 西郷従宏『元帥西郷従道伝』66頁〔芙蓉書房出版、1997年〕を参照。なお、著者は従道の次男従徳の四男。該書執筆の動機を祖父従道に関する伝記の不正確さや過度の賛美の是正、資料の補足補充に置く。

⁴ 西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集』第6巻「西郷隆盛年譜」558-560頁(大和書房、1980年)を参照。

⁵ 張華『博物志』雑説下にまとまった記述が見える。ただ、西郷在世当時に於ける直接の情報源としては、漢詩創作の参考に通行していた類書(例えば『円機活法』天文門、河漢)等が有力であろう。なお、当該伝承の詳細については、袁珂著・鈴木博訳『中国神話伝説大事典』492頁「天河」(大修館書店、1999年)等が参照に便利である。

あるが、先行書の中より小論では以下の4種を主要な訳注書として取り上げたい。

一つ目は、大木俊九郎編著『(分類註解) 西郷南洲先生詩集』(鹿児島県立図書館、1958年)である。後続の西郷隆盛漢詩集に於いて常に参照され、「漢詩集の傑作」(後述の山田尚二)とも称される。口語訳にあたっては、平明且つ文脈を把握しやすく訳出しようと努めたように窺われる。186首を収録する。二つ目は、西郷隆盛全集編集委員会[編]『西郷隆盛全集』第4巻(大和書房、1978年)である。『西郷隆盛全集』全6巻の一部として漢詩179首を集成したもので、該書以前に遺墨集や注解書として公刊された西郷隆盛漢詩集の類を下敷きに、本文校訂の上、訓読並びに語釈を附している。刊行当時に於ける決定版と言える。三つ目は、[渡辺正訓解・]山田尚二編『新版西郷隆盛漢詩集』(西郷南洲顕彰会、2000年)である。現存する書幅や草稿を根拠資料とし、それら大半の影印を所蔵情報とともに掲載しつつ従来の漢詩集翻刻の錯誤や他人作の誤入を正すほか、訓読、口語訳、語釈も先行注解書を踏まえて更に洗練させている。194首を収録する。四つ目は、松尾善弘著『西郷隆盛漢詩全集』(斯文堂、2010年)である。三つ目に挙げた『新版西郷隆盛漢詩集』を底本に更なる洗練を図る。特に従来の漢詩集にはなかった声律上の観点を盛り込み、平仄の解説に詳しい。199首を収録する。では、これら各書に於いて、転句は如何に解釈されたのか。

一つ目の『(分類註解) 西郷南洲先生詩集』(60頁)では、

姑息を離れんと欲するは却って姑息、

と訓読し、

弟信吾は因循姑息を離れようと思つて仏蘭西に留学をして居るが、強ひて姑息を離れようとすると、却て姑息に陥るものである。

と、弟への訓戒として解釈する。「弟信吾は因循姑息を離れようと思つて仏蘭西に留学」と、言わば行間を読む形で言葉を補いつつ口語訳するのは、該句の解釈に苦心した末のことと見受けられる。事実から言えば、従道の洋行は朝命による実務的視察であつて、従道自身が因循姑息(古い習慣に頼つてその場をしのごうとすること)から脱却すべく留学を志した訳ではない。また、早期の帰国を強く願う結句への繋がりも円滑とは言い難い。

二つ目の『西郷隆盛全集』(46頁)は、一つ目と同じく、

姑息を離れんと欲するは却って姑息、

と訓読し、「姑息」に対して「一時のがれ。」と注する。これを踏まえて直訳すれば、「一時のがれを離れようとするのは、却つて一時のがれである」とでもなるであろうか。口語訳を掲載しない体裁であるため、該句の意味を詩全体のなかで如何に解釈したか詳細は不明である。ただ、訓読から窺い知る限り、やはり意味の通りが良いとは言い難い。

三つ目の『新版西郷隆盛漢詩集』(72頁)もまた、

姑息を離れむと欲するは却って姑息

と訓読し、

弟はフランスに留学しているが、その場しのぎのいい加減なやりかたから離れようとする、

かえっていい加減なことになってしまう。

と口語訳を付ける。『(分類註解) 西郷南洲先生詩集』を始め、先行諸書の訓読に倣いつつ直訳に近い形で句意を取ろうとした跡が窺われる。大木氏同様(或いは大木氏に倣って)、兄隆盛から弟に宛てられた訓戒の言葉として読むようであるが、具体的に何を指して言うのか今一つ判然としない。この点、次に見る松尾氏は率直にその見解を述べられる。

氏は、『新版西郷隆盛漢詩集』(77頁)に於いて、

姑息を離れんと欲すれば却って姑息たらん、

と訓読した上で、

その場しのぎのいい加減なやり方から逃げようとする、かえっていい加減な結果になってしまうものだ。

と口語訳し、語釈欄には(傍線は筆者による)、

○姑息＝一時のがれ、間にあわせ。3句の現実の意味不明。

と注釈を附す。筆者も全くの同感であり、従来の該句に対する訓釈では、作者西郷隆盛の真意を把握し得ないように思うのである。

3 『礼記』檀弓上篇を出典とした「姑息」の解釈

この問題を解く鍵は、該句に於いて二度繰返される「姑息」の解釈にあると考える。確かに「一時のがれ」や「間にあわせ」を語義とする「姑息」であるが、これが『礼記』檀弓上篇の一節を出典とすることを押さえなければ詩意を解することは叶わない。

話は、曾子(孔子の弟子曾参)臨終の場面である。重い病の床にあった曾子は、側仕えの童子の指摘により、自分が魯国の大夫(国君により封建された領主)季孫より賜った簀(寝台に敷く竹製の敷物)の上に臥していることに気付く。大夫ではない曾子は、それを身分不相応のこととして、息子曾元に粗末な簀と取り替えるよう依頼する。しかし、曾元は父の臨終の身を慮って俄には応じようとしなない。そこで、曾子が発した言葉が以下の一節である(傍線等は筆者による)。

曾子曰、爾之愛我也不如彼。君子之愛人也以德、細人之愛人也以姑息。吾何求哉。吾得正而斃焉斯已矣。

曾子曰く、「爾の我を愛するや彼(指摘をした童子)に如かず。君子の人を愛するや徳を以てし、細人の人を愛するや姑息を以てす。吾何をか求めん。吾正を得て斃るれば斯に已まん」と。

曾子は、正しさを得ることができれば死んでも本望であるという信念のもと、重病の我が身を心配して簀を取り替えたがらない曾元に対し、それは「姑息」、すなわちその場しのぎや目先だけの思ひ遣りに依る小人の愛し方であると告げ、君子であれば徳義にかなうようにして人を愛すべきことを諭して聞かせたのである。これは、所謂「易簀」の故事として知られる一節でもある。

傍線部「君子の人を愛するや徳を以てし、細人の人を愛するや姑息を以てす」に注目したい。こ

れを遠くフランスに滞在する弟従道を思い遣る隆盛の視点で捉え直すと、次のように読むことが可能となる。すなわち、本来、官費による視察研究の遊学であれば、新生日本を担うに足るよう万難を冒してでも研鑽に励み、己が成長を遂げるよう助言するのが兄としての道理であり、厳しいながらも弟に対する真の愛情と言えるかも知れない。しかし、父に代わって面倒も見てきた16歳年少の弟に対し、どうしてもただただ無事であることを願う、そんな弟にとって何の實りもなくその場しのぎにしかならない情愛が勝ってしまう。以上のような捉え方である。

これを踏まえれば、転句「欲離姑息却姑息」は、「姑息を離れんと欲するも却て姑息」と訓読し、「とにかく無事であればそれで良いという、弟にとってその場しのぎにしかならない情愛から離れようとしても、その身を案じるにつれ益々無事を祈るだけの気持ちになる」と口語訳できるであろう。起句で詠み起す兄弟隔絶の状況下、承句では兄が弟について客星に祈るのであるが、その心中は転句で言うように、たとい弟が苦勞してでも視察任務の完遂や研鑽修養の成就を願うべきところ、そのような「徳」による愛情を押さえ込み、どうしてもただの無事を祈る「姑息」の愛情に捕らわれてしまう。その結果としての祈りの言葉が、結句にいう、多才多能になることを願わずただ早期の帰国を願うことであつたと全体を通して解釈することも可能となる。

4 おわりに

以上、従来判然としなかつた転句「欲離姑息却姑息」について、『礼記』檀弓上篇に於ける「姑息」を典故とした措辞と見ることで句意を明らかにし、詩全体の流れや意味も明確にし得たと考える。小論冒頭にも確認したとおり、この詩は西郷隆盛から弟従道に宛てられたものである。そうであれば、兩人にとって該詩の詩意は明白なものであり、近人諸氏が解釈に苦勞したようなことはなかつたはずである。それは、西郷兄弟が、詩を読んで『礼記』の件の一節が当たり前に想起されるほどに十分な漢学的素養を有していたことを意味する。彼らと同時代を生きた明治維新前後の知識人の漢学的素養を考える際、各地の藩校や、鹿児島であれば郷中教育で学習された漢籍に如何なるものがあつたかを比較的容易に知ることはできる。しかし、如何ほどに習熟し、自家薬籠中のものとしてその知識を使用していたかについては、案外把握は難しいように考える。小論は、僅か漢詩一首の、しかも転句中に於ける一語の用典を明らかにしたに過ぎない。ただ、これが贈答詩であつたことも幸いし、贈る側と贈られる側、双方の共通理解を推し量れる利点を有すること、ひいては当時の知識人一般の漢学的素養を窺い知れる好例と見做し得ることを考え、報告した。